

## 追 補

檜 崎 彰 一

このシンポジウムの記録が発刊されるに当っておことわりしておかねばならないのは、本年3月、愛知県教育委員会から『愛知県古窯跡群分布調査報告(Ⅲ)、(尾北地区・三河地区)付・猿投窯の編年について』が発行されたことである。シンポジウムの中で従来の猿投窯編年について、①飛鳥時代の編年区分の問題、②奈良時代の編年区分、特に(原始)灰釉陶器の初現の問題、③平安時代の編年区分、特に灰釉陶器の終末期の編年区分の問題、の3点についての修正を行った。そのうち、①、②についてはそのままであるが、③についてはその後の資料の再検討の結果、さきの報告書のなかで再修正を加えた。その要点はシンポジウム段階において提示した(O-53) - (NN-82) - (百代寺)の編年について、中間のNN-82号窯の内容がO-53号窯の内容と平行することが明らかとなったため、標式窯として東山(H)-72号窯に改めたことである。いま1つはシンポジウムの中で多くの人々から要請されていた灰釉陶器の年代の問題である。全国各地の平安時代の土器・陶器の変遷と地域相互の関係の究明に多くの時間が割かれ、猿投窯の年代論にまで及ばなかったのは司会の不手際でおわびしなければならない。そこでその欠を補うために取敢えずの所見を発表したのが、『愛知県古窯跡群分布調査報告』の末尾に付加した新編年表と年代比定である。その要点は従来の編年体系のまま、刷毛塗り灰釉(第Ⅴ段階-黒笹14号窯期・黒笹90号窯期)の年代を引き上げると、11世紀代が陶器の空白期間となるため、修正を保留してきたわけであるが、第Ⅵ段階の折戸53号窯期のあとに2段階付加されることによってこの空白を埋めることが可能となったことである(本書P71, 補注4参照)。詳しくは同報告書を参照されることを希望して、追補としたい。

### (編集後記)

昭和56年のシンポジウム開催にあたりましては、『シンポジウム平安時代の土器・陶器発表要旨』と「発表者資料編」を印刷し、参加者に配布しましたが、限られた部数のため即日になくなり、その後当館へ、『発表要旨』の残部の問合わせが多数寄せられました。また、全容の公表についても、各地の方々から要望されました。そこで、発表内容の記録を最重点におき、当館研究紀要2として、編集・刊行することとしたのであります。しかし、録音テープからの原稿起しは、思いのほか手間どり、発表者・講演者の先生方への原稿校正は、短時日のうちをお願いすることになってしまいました。幸い、諸先生とも編集の意図に心よく理解を示され、ほとんど期日までに手を入れ、返送していただくことができました。紙面を借りて感謝申し上げます。

なお、すでに発表当時の内容をもとに、新たな編年体系を公表されました論文・報告書もございますが、それら新しい内容につきましては、各発表の末尾に、補注で付記していただくのみといたしました。本書の発表者・読者の皆様方にご了承願う次第であります。

(学芸課 柴垣記)